

地域生活の再生

秋 田 清

On the Revitalization of Community Life

Kiyoshi AKITA

I はじめに — スウェーデン社会の在り方

2月に、スウェーデンに30年くらい住んでいらっしやった竹崎さんという方の講義を聞きました。印象的だったことは福祉の在り方が実に具体的なことです。もっともらしい建て前や、理屈ではなく、実際に問題を抱えている人の希望に合わせて、具体的に解決していくという態度が一貫しているということです。

例えば、未婚の女性が子供を抱えて困っている。彼女は働く場所と働いている間子供を預ってくれる保育園を探している。こんなことがあったとします。最近は多少変ってきたかも知れませんが、日本でだったら大変です。未婚の女性が子供を生むなんてとんでもない。そんな個人の気紛れの結果について社会が責任を取る必要はない、などということになります。保育園を見つけることが困難なばかりではなく、そんなふしだらな者を雇ったら風紀が乱れる、などといわれて職を見つけることも困難でしょう。問題は何も解決しません。子供を抱えた未婚の女性が蔽に存在しているのです。必要なものは職と託児所です。これをスウェーデン社会はゴタクを抜きに提供するのだそうです（ほんとうは、たぶんゴタクがあるほうがおかしい。他人の好みにケチをつけるのはいいことではない）。

老人がいます。かれは一人で生活し続けることを望んでいます。必要なものは住居と収入です。歳老いた親を誰が面どう見るかという議論ではありません。大事なものは当事者の希望です。したがって子供も親も同居を希望すれば必要な

住居が提供されるということです。もちろん住宅事情が違います。200年、300年も持つ住宅を建てる国と20年、30年のローンが終わる頃には住めなくなっている家を建てる国との違いです。

具体的な問題を具体的に解決していくことの出来る社会、人間関係のすがすがしさがそこにはあります。

もうすこし、街づくりの在り方をみておきます。一番ヶ瀬さんは次のように報告しています。

【ニュータウン計画（1960～）】

その地域計画は、最初に交通計画からすすめられます。地下鉄およびそれに連なる国鉄、あるいは飛行機など、すべての交通手段がどの様な身体状況でも活用できるようにされています。

それから、地下鉄の駅周辺半径500メートル四方の居住者の調査をして、必要な生活施設を設営します。そこをセントルーム、意識をすれば「広場」にするわけです。そのセントルームに設営されている生活施設は、今日では50数種類に及びます。具体的には、くらしにお金がいりますから、銀行・郵便局・社会保険事務所・福祉事務所、あるいは生活財を買うための商店や、消費市場では最もシェアの高い生活協同組合のスーパーとか、そのたの施設があります。……集会場、学習室あるいは屋内体育場、プール、図書館、映画館などが設営されています。

さらに、この地域計画には2つの原則が貫

かれています。1つは、いっさい車を通さない原則、もう1つは、道路・建物のどれもが、車椅子で利用可能なように斜面を造るなどの工夫をするという原則です。

こうした施設の周辺には高齢者、障害者が移住しているのですが、子供と近所に住みたいという場合には、子供も同じ団地に住めるように配慮をし、高齢者はなるべくセントルールの近くに居住させる政策をすすめている自治体もあります。……

車椅子のかなり重度のリウマチの人でも、車椅子で充分使いこなせる炊事場、目がまったく不自由な人でも一定の温度になれば音で知らせる設備とか、実に細やかに工夫されていて、誰でも生活が可能になっています。そして、どの部屋にも、ベルとインタホーンがあり、それを押すと、中央のセントルームに24時間待機しているホームヘルパーが、すぐに飛んできます。そして病院から退院した人については、一定の時間を決めて、ホームヘルパーの人と訪問看護の人がチームを作ってパトロールをし、在宅福祉が保障されています」(一番ヶ瀬康子『地域に福祉を築く』pp.49~50)。「家族は含み資産である」などと語る「日本型福祉社会」の在り方と、家族の世話も公務として扱われるスウェーデン社会との違いです。

そのほかスウェーデン社会の在り方にはいろいろと興味深い話があります。「スウェーデンでは、15~54才の女性の9割が働いているのに、1990年の出生率が2.0と先進国では最も高いが、その40%は、婚外児である」(上野千鶴子『90年代のアダムとイヴ』日本放送出版協会220頁)。出生率の2.0というのにも驚きますが、それ以上に40%が婚外児というのにはびっくりします。病気や事故によって両親の内のどちらかが死亡した結果としての片親の子でさえ、さまざまの偏見と闘って生きていかなければならない日本では考えられないことです。

離婚に慰謝料がないというのもおもしろい(もちろん、面白いのは離婚に慰謝料がある方なのですが)。男女が共に経済的にも自律しえていれば、そんなものは必要ないはず(日本では、永久就

職が永久でなかった場合には退職金がもらえるということなのでしょう)。

ボランティアがないと言うと、福祉の先進国でそんなことがあるかとお思いになるでしょう。でも、年寄りやハンディキャップを持った人に年金その他の収入が保証されていたり、介護が公務としておこなわれていればボランティアなど必要ないわけです。

選挙の投票率が90%以上というのも驚きです。個人が社会に参加しているという実感があることの一つの現れでしょう。政治家になりてが少ない、というのはすごいと思います。政治などは所詮個人の活動の場を作るものにすぎないわけで、他人の活動の場を作るより、自分で活動するのが面白いのは当たり前です。

なぜこんなことが可能かと言いますと、一人一人がもっとも根本的なところで独立しているということによるのだと思います。根本的なところでというのは一人一人が親であったり子であったり、社長であったり従業員であったりする前に、人間として平等であるというところで互いに認め合い、単に人間であるということをも基礎に自律し、お互いの関係を造り上げようとしているということです。西洋近代が造りだした積極的な要素です。

こうしたことが日本でも今、具体的に問題になってきております。最近「ボーダレス社会」とか「ダウンサイジング」とかいう言葉がよくつかわれますが、それはまさにこの人間関係の在り方の問題をさします。「福祉」の問題から一般的な社会の在り方に話を移しましょう。

II 新しい人間関係の在り方

【ボーダレス社会】

国際化という言葉も使われますが、ボーダレス社会という言葉もあります。国際化というのは国家を前提にしています。ところがボーダレス社会というのは国と国との境がなくなるということです。それは同時に国をまとめている原理の崩壊でもあります。また社会のさまざまな人間関係の在り方の変化をもさします。これま

でとは異なった人々の関係が地域的に形成されつつあります。そこではこれまでの社会秩序や人々の価値観や生活の基準がこれまでとは随分違ったものになりつつあります。政治家や会社の重役や金持ちがすばらしいとか、都会はよくて田舎は駄目だとか、大企業はすばらしく中小企業はしょうがないとか、世界文学はよくてトレンディドラマはつまらないとか、新聞記事は1面記事が高尚で3面記事は愚劣だとか、そんなものは所詮好みの問題にすぎないことがはっきりしてきています。

そうした一人一人の個性を大事にしながら社会関係をどう作って行くかが問題です。この点に関して「ネットワーク社会」や「ダウンサイジング」という言葉でかたられていることは意味を持っているように思います。

【ダウンサイジング】

「ダウンサイジング」という言葉をお聞きになったことがありだと思います。直接には規模の縮小ということです。コンピュータの分野で「ダウンサイジング」という言葉が使われておりますが、単純化して、具体的なところでお話します。しばらく前までは、ひとつの企業であれ、一定の地域であれ、ネットワークをくむ場合、ホストコンピュータをひとつ置いて、それに端末をつけて各人が利用しておりました。情報やデータはすべて一旦ホストコンピュータに蓄えられます。各人はホストコンピュータを介して初めて他の端末の人と連絡できたわけです。ところが今、パーソナルコンピュータの記憶量やスピードその他の性能がよくなったことを基礎に、それぞれのパソコンが自分のところで情報を蓄積し、ネットワークを通じて、そのまま共同利用されるようになってきました。

こうしたことが、人々の考え方を換え、社会の在り方にまで影響を及ぼしてきています。ダウンサイジングとは平の個人たちの集り、それで社会を造っていこうということです。

情報ネットワーク社会というのは、国家や国際政治などというものを、吹っ飛ばして、一人

ひとりが直接世界の人々とつながる可能性を内に孕んでいます。そうなったとき、日々の生活の上になつてそれを些細なものとして見下している政治などは人間の生活にとってほとんど意味をなさないものになります。コンピュータネットワークの在り方も、社会の在り方も、生活上の様々な事柄、例えば政治、芸術、研究、労働、遊びなどの事柄の在り方も変わってきております。そうしたすべての分野で価値に置いて優劣の区別のない社会が生まれつつあります。

偉い人、普通の人、駄目な人など区別のない、皆平等の社会です。偉い人がいて、人を威したり、おこぼれをやって人を従えたり、根回しをしたり、策をめぐらして人を落としたり出来る社会は終わりつつあります。同時にすべての情報がお偉らがたの意図に反して、ただちにすべての人に知られる可能性も著しく増えていきます。はったりや威しで何とかなる世界ではなくなってきました。人がつまらない欲をもたないところではそんなものは無力です。

そういう意味で、一人一人の毎日の生き方が問題になりつつあります。自分らしい生き方、自分が一番快適なとき、楽しいときそれを大事にして行こうということです。

【生涯教育】

こうした中で、教育の在り方も随分変わってきています。これまでの教育の主要な目的は人間の序列づけでした。しかし社会の序列が意味をなさなくなればそんな教育も無意味です。教育は今大きく変わりつつあります。生涯教育の意味もその重要性もここにありますが。生涯教育とは地域社会そのものの教育、地域社会の変革ということです。地域社会における人々の生活と別に教育があるのではなく、教育は生活の一部になるということです。

したがってそれは、既成の大学内での教育をも変えるものです。単に肩書きや資格を取ったり、就職のために大学に行き、そして職は金を稼ぐための手段ということでは終わらなくなり、教育は地域の人々の生涯の生活、生き方そのものの変革へとすすまざるを得ないもので

す。また企業の在り方も変えていかなければなりませんし、ずいぶん変わってきてもおります。利潤の獲得(金儲け)だけが企業活動の目標だった時代は終わろうとしています。利潤を獲得するための企業から、そこで働く個人の生活や生きがいを問題にするものになりつつあります。さまざまな欲求を社会的に調整する機能を果たす限りで利潤は存続するかもしれません。しかし、経済活動が人間の他の諸活動から切り離され、独自の意味をもった時代は終わろうとしています。その時我々が、金儲けではない、他のどんな基準で企業や社会を運営して行けるかが問われているように思います。

何を造るか、何を造らないか、どれだけ造るか、どの様に配分するかが具体的に問われてくるように思います。どんなところで生活するか、どんな家に住むか、何を食べるか、どんな着物を着るか、誰と付き合うか、どんな付き合い方をするかが問題です。

知識とは所詮、人間が危機に直面した時、生活を改善したいと思った時、驚きを感じた時必要な限りであればいいものです。つまりは生活の智慧です。その意味で、生涯教育とは地域社会や人々の生活を変えてゆこうという運動とそこで必要な智慧を出し合い、子や孫に引き継いでいくということです。

III 地域生活の再生

つまるところ町作りとは、人々の生きざま、死にざまの問題です。その意味では、「町作りは人作りだ」と言うのはどうも中途半端な気がします。言葉としても、人を町作りの手段にしているように聞こえます。人々が自由に生きることが出来るかどうか問題です。町は結果であって、人々が自由に生きている町が素敵な町だということになります。人々の活動の中にか素敵なお町はないとも言えます。人々が自由に生きようとする意思を持った時素敵なお町は始まります。

でもその時ハンディキャップをもった人々のことをちょっと考えて見たいと私は思います。

社会がハンディキャップをもった人々の AMENITY をどの様に保証できるか。快適な社会というときこれこそが問題だと思えます。一人一人の快適さを保証できる社会が快適な社会であるとすれば、そこからハンディキャップを持った人を排除してはいけないように思います。ほんとうの快適さと言うのは、その社会の誰かをそこから排除している限りは実現できないもののように思います。快適な社会とは、極論すれば、障害者が障害者であることを全く意識しないで生活ができると言うだけではなく、障害を持っていることを、ちょうど時代や地域や民俗間の文化の相違を楽しむように、楽しむことができる社会なのかも知れません。

そうした社会は、これまでほとんどの地域がそうであったように、未来に向かって発展することを唯一の目標とした生き方、社会の在り方を追及していく限りは実現不可能なことなのかも知れません。

この点に関して私は楽天的です。ボランティア活動をしている人たちはよく次の様なことをいいます。「確かに直接的には自分たちが障害を持った人たちの手助けをしているのだけれど、手助けをしている自分たちが、むしろ助けられているという気がする。彼らが生きる手助けをしている自分たちが生かされている。彼らが自分たちが生きることを支えてくれている」。私はこの言葉には真実味があるように思います。

こうしたことを踏まえた上での、快適さが大事だと思えますし、その実現のための活動とそこでの自己確認こそが生きるということのような気がします。

【類としての人間】

私は昔、本を読んだり、考えたりしすぎて5年間くらい狂っていたことがあります。その時いろんな考えが頭の中に浮んできましたが、そのひとつにタイムマシンのことがあります。最初は常識的なところで、時間移動のことを考えていたのです。そうしたら、時間もひとつだけあるのではなく、ちょうど空間が3次元で成っているように、時間も一元的ではない(科学的な

知としての責任を負う気はありません) ことに気づきました。次には、無限の宇宙があることに気づいたのです。どういうことかという、例えば、人間はさまざまな場面で迷うことがあります。右に行こうか左に行こうか迷います。右に行ったら右の世界が、左に行ったら左の世界が生まれます。そしてまたそれぞれの世界に右左があって、そのまた……と言った具合で網の目状の世界が広がります。さらに時間が加わると言葉では表現出来なくなる無限の宇宙が広がります。ひとつの世界に居る自分は他の世界に居る自分を知らない。でもそれらすべての世界は可能性としては想像できるわけです。

時間と空間をこえて存在している無限の宇宙。時間と空間が別のものではない宇宙、これは一体何なのか。そんな無限の宇宙が実際に存在しているのかも知れません。そうであれば、タイムマシンなどは簡単にできるでしょう。あるいはそれは現実ではなく、無限の宇宙はつまるところ、自分の脳が脳自身を意識しているに過ぎないのかも知れません。ここまでは常識です。

でもちょっと見方を変えれば、実はわれわれがいま生きているこの世がそのまま無限の宇宙なのかも知れません。今となりにいる人は別の自分なのかも知れません。そうだったらいいなと思う人もいるかも知れませんが、冗談じゃないと言いたくなる隣の人もいるでしょう。でもさまざまな人々のいろんな生き方が、そのまま別の自分の生き方なのかも知れません。

隣の人が別の自分というのは無理があるかも知れませんが、でもこれだけの事は確実に言えます。我々は絶えず他の人間たちと関わりをもって生きています。他の人間たちの影響を受け、他の人間たちに影響を与え、人間以外の生き物や無機物からなる自然にさえ影響を与え、影響を受けて生きています。その意味では自分がどうあるかは自分の周りがどうあるかということと同じことです。我々はそんな繋がりの中で生きていくわけです。

たしかに、日々現実の中で暮している個人は利己的な存在です。自分を中心に世の中を回したいと思っています。でもどこかで類としての共

感を求めているようにも思います。この点に関して、イルカが人間の病を治す話は示唆的です。

イルカが障害児(自閉症、身体的機能障害)と共に泳がれらを直す施設があります。自閉症の子供が海に入るとイルカが近寄ってきて、寄り添い一緒に泳ぎはじめます。母親にさえ心を開かなかった子供がイルカにたいして心を開き、そのことを通してしだいに人間との関係を回復していきます。イルカは勝手に遊んでいるだけかもしれませんが。あるいはそうであるがゆえになんのストレスも子供に与えず、子供に安心感を与え、その心を解放してゆくのかもしれませんが。押し付けがましい人間たちの対応との違いが問題なのかもしれません。

しかし人間もおなじ生き物として、そうしたイルカの「優しさ」をかつては持っていたのかもしれませんが。あるいはこれから獲得しなければならないものかもしれません。ともあれそうした類としての、生き物としての共感に、ひとつの可能性があるようにも思います。それは生き物としての共感などというオウギョウなものではなく、たんなる遊び心なのかもしれません。

IV アメニティ

かつて、人間とは何ぞや、人間如何に生きるべきかなどという問に答えながら、膨大な知の体系をこしらえて、自らの行動の基準にしてきた人間が、いま、自分が快適であること、楽しいことそれを基準にして生きていこうとしているわけです。一見するとこんな馬鹿なことはありません。こんなことに気づくのに人間は何万年かの歴史を必要としたのです(もちろん、絶えずこのことを問題にしてきたとも言えます)。そんなんでよければ誰も苦労はしない、と言いたい気もしますが、苦労しないで生きてゆけるんだからその方がいいようにも思います。

この点に関しても、最近面白い話を聞きました。「大分県ルーラルシンポジウム(1993,3,24.)」というのがありまして、そこでパネラーの一人に政所さんという方がいらっやって、次のような発言をされていました。

アメニティということばは非常にあいまいに使われているが、私たちは、AMENITYということばに、ACTIVITY(活動)とかIDENTITY(自己実現、自己確認)ということと同時に含ませて使っているように思う。人びとが自分のやりたいことをやり、その活動のなかで、自分が生きていることを実感できること、活動のなかでの充実感、そういうことを私たちはアメニティということばのなかに入れてるように思う。その意味で、素敵な町とはそこに住んでる人が生き生きしている町のことだと思う。つまり、人々が生き生きと活動できることが大事なのだ。この点についてたとえば自分は「15分、30分、60分」ということをいっている。

*15分でストレスを解消できる施設が在ること。

*30分で商業地、文化施設、コミュニケーションの場所が在ること。

*60分でライフワーク(レジャー、読書、その他)の場所が在ること。

こんな生活環境があると快適な生活がおくれると思う。

今いろんなところで町作りがおこなわれているが、2040年までに自治区があちこちに出来るのではないかと、思っている。自治区というのは、独立できるもの、異なるものの交流、固有の主張や議論が出来ること、こんな要素を持っている町のことで(政所利子[大分県ルーラルシンポジウム1993,3,24。])。

パネルディスカッションのなかの、ばらばらの発言のいくつかを寄せ集めたものなので、必ずしも真意を伝えてないと思いますが、私が面白いと思うのは話が具体的なことです。たぶん必要なのはもっともらしい意義づけや決意表明ではなく、自分の好き嫌いとそれに基づいたプランと活動なのだと思います。

ただもうひとつ、政所さんの話で印象に残ったことは「町として誇れるものをつくるための広場」とか「風味、風景、風格」などという言葉を使われることです。われわれはかつて貧しかったがゆえに、豊さを求めてきました。しかし実現した豊さは、虚飾に満ちたものでしかな

かったようにも思います。自然の生き物としての尊厳とか誇りとかいうことに思いをいたすべきなのかも知れません。

むかし、勝手に山の下草を刈る会などというのがありました。自分の山でもないのに、山が荒れているからといって、手弁当でかけて行って、勝手に下草を刈ってくるというのです。川の水を守る会というのは全国いたるところにあるようです。これはたぶん世に言う「ボランティア」ではない。むしろ一つの遊びのような気がします。でも、そうであるがゆえに人を惹き付けるものを持っているようにも思います。

地域生活の再生、などと大上段に構えたタイトルを付けましたが、それはつまりとところ、一人一人が一寸だけ見方を変えたり、行動の基準をちょっとだけ変えることから始めるのかも知れません。所詮あらゆることはやったが勝ち(価値?)なのです。

*本稿は1993年5月18日、本短期大学部の公開講座での講義に加筆したものである。

【参考文献】

- ①大熊由紀子『寝たきり老人のいる国いない国』ぶどう社 1990年 1500円
- ②坂巻 熙『生きること 生かされること』ぶどう社 1990年 1500円
- ③一番ヶ瀬康子『地域に福祉を築く』労働旬報者 1992年 1500円
- ④上野千鶴子『90年代のアダムとイヴ』日本放送出版会 1991年 1200円
- ⑤竹崎 孜『生活保障の政治学』青木書店 1991年 2060円
- ⑥トラベルビー『人間対人間の看護』医学書院 1974年 3296円
- ⑦日経広告研究所編『「多価値化」社会』Part1~3 日本経済新聞社 1989~91年
- ⑧小野寺明美『変わり始めた生活者が見えますか』にっかん書房 1990年 1330円
- ⑨夏村波夫『そして、みんなミーハーになった。』PHP研究所 1991年 1100円
- ⑩橘川幸夫『一応族の反乱』日本経済新聞社 1990年 1250円